

北陸大学図書館報

NO.50



◆◆ 第20回読書感想文・第2回書評コンクールと 第3回ビブリオトークを終えて ◆◆

図書館長・薬学部教授・読書感想文・書評コンクール審査委員長

鍛冶 聡

このたび第20回読書感想文・第2回書評コンクールが実施され、最終的に感想文208編、書評32編の応募作品がありました。コンクールに参加してくれた学生の皆さんと本学教員・職員・関係者の方々に御礼を申し上げます。誠にありがとうございました。厳正なる審査の結果、最優秀賞1名（感想文）、優秀賞5名（感想文4名、書評1名）、佳作10名（感想文7名、書評3名）、努力賞13名（感想文11名、書評2名）の計29名を選出させていただきました。今年度は直接審査に関わることはありませんでしたが、皆さん一人ひとりの作品から、自分の思いを文字に込めて発信することの大切さを改めて認識した次第です。次年度もより多くの作品が寄せられることを期待しております。

表彰式・ビブリオトークを令和3年1月13日（水）17時15分からオンラインにて開催いたしました。

今回は、コロナ禍のなか、直前まで表彰式及びビブリオトークの対面での開催に向けとことん手を尽くしましたが、オンラインでの実施となりました。しかもとても無念でしたが、参加人数を絞りに行きました。

表彰式では、モニターというかパソコンの画面に向かって読み上げる何とも言えない摩訶不思議な感覚に陥っておりました。正直申しますと、表彰状の文面を読み上げつついろいろな不安がわいてきました。さらに言うと、入賞者によるビブリオトークについても、やりづらいただろうなあ・・・と。

ところが、いざ開始となりますと表情が大写しのこともあり、実に生き活きかつ闊達なトーク。本が好きで、読むことが好きで、そして伝えることが好きなんだなあと感動を覚えました。この紙面を借りて、一人ひとりのトークを実況中継と行きたいところではありますが、割愛させていただき、今後の表彰式とビブリオトークにさらなる工夫を盛り込むことを期待いただきたいと思います。繰り返しますが、次回のさらなる応募作品の増加を祈念します。



第20回読書感想文・第2回書評コンクール

審査結果発表

応募作品240（感想文208・書評32）編の中から、次の作品が選ばれました。

入賞作品

最優秀賞(読書感想文の部)

溝尻 胡桃さん 一步を踏み出す勇気の大きさ (医) 1年

優秀賞(読書感想文の部)

宮崎 琴音さん 言葉で世界は変わる (薬) 2年
 澤野 雛子さん 人のために自分のため (医) 4年
 青葉 菜摘さん どのような人生を歩むのか (医) 1年
 三步一 桐子さん 人間のもつ闇の側面 (医) 1年

優秀賞(書評の部)

森田 なつみさん 驚きの連続、姉妹ミステリー (医) 1年

佳作(読書感想文の部)

横山 睦さん 医療の選択性 (薬) 3年
 山科 純鈴さん 宗教とは (国) 1年
 大澤 佳鈴さん juvenile delinquents who can't cut the cake (医) 1年
 大島 萌愛さん 『僕はロボットごしの君に恋をする』を読んで (医) 1年
 竹田 弥礼さん それだけで充分 (医) 1年
 森下 千鶴さん 『あの花が咲く丘で、君とまた出会えたら。』を読んで (医) 1年
 吉田 琉梨佳さん 傍観者の罪の重さ (医) 1年

佳作(書評の部)

宮崎 琴音さん まだ蕾のあなたへ (薬) 2年
 澤田 梨瑚さん 『なきむし姫』を読んで (国) 2年
 山下 梨優花さん 『タイタニックがわかる本』の魅力 (国) 2年

努力賞(読書感想文の部)

井上 凜香さん 乳がんや自分の将来についてなど (薬) 3年
 中松 奨悟さん 人間の強さと自然の厳粛さ (薬) 1年
 本田 大吾さん 『生き方』を読んで (経) 3年
 侯 勝蘭さん 誰に懲らしめるべきか (経) 3年
 石黒 萌々子さん 『桜のような僕の恋人』を読んで (国) 1年
 瀬戸 芽衣美さん 思いやる心 (国) 1年
 出坂 美碧さん 『おおかみこどもの雨と雪』を読んで (国) 1年
 青山 結香さん 人とのつながり (医) 1年
 小坂 真輝さん 『告白』を読んで (医) 1年
 萩野 美優さん ライトノベルから学ぶ人との関わりの重要性 (医) 1年
 矢島 梨沙子さん 『氷の仮面』を読んで (医) 1年

努力賞(書評の部)

小竹 輝さん 今だからこそ読むべき本 (国) 2年
 宮島 涼誠さん 『スクラップ・アンド・ビルド』を手にする前から読んだ後まで (国) 2年

ベストタイトル賞

中松 奨悟さん 人間の強さと自然の厳粛さ
(書名『老人と海』)

(薬) 1年

* (薬) は薬学部、(経) は経済経営学部、(国) は国際コミュニケーション学部、(医) は医療保健学部です。

◆◆ 読書感想文・書評コンクール入賞作品の図書 ◆◆



本館1階の読書コーナーに入賞作品の図書を配架していますので、是非、読んでみてください！

※一部貸出中の図書もあります。

最優秀賞 (読書感想文の部)

一步を踏み出す勇気の大きさ

医療保健学部 1年次生 溝尻 胡桃さん



書名 +1cm たった1cmの差があなたの世界をがらりと変える
著者 キム・ウンジュ イラスト ヤン・ヒョンジュン
訳者 築田 順子
出版社 文響社

今年は新型コロナウイルスの感染蔓延により、私たちの生活様式が大きく変わり、様々な活動における自粛が余儀なくされた。そのような状況は人々に大きな影響を与え、職を失った、家庭環境が悪化したなどといったニュースは、連日報道され、聞かない日はない。そして新型コロナは私達1年生にも悪影響を与えた。クラスメイトとほとんど交流することができない大学自粛生活や、突如として始まった遠隔授業は常に不安を煽られる日々であり、精神的な疲労に苦しめられるばかりだった。物事を前向きに捉えることができなくなっていた私は、そのような折りに出会ったのがこの本であった。

+1cm という本は、今の人生に満足できず、幸せを感じることができないと考えていても、「たった1cm、もの見方を変えるだけで世界が大きく変わる」という信念の基、「人生にポジティブな変化と驚きを与えてくれる本」と書かれているように、クリエイティブな言葉を巧みに用いて読者を引き込み、前向きにさせる効果を持つ1冊である。この本から私が衝撃を受け、考えさせられたことも多くあった。中でも、私が特に勇気づけられた言葉は、「不可能」というタイトルにある、「不可能にちがいない」「絶対にムリ」そう言われている世の中の大半のことはただの刷り込みにすぎない。」というものである。入学当初、新型コロナの影響により大学で新しい仲間とは

とんど話すことがなく、友人を作れなかった私は、初めての遠隔授業が始まって、何か困ったことがあっても誰にも助けを求めることができず、顔を合わせたことがない先生に対してもわからないことを質問することは憚られ、何をすることも常に気が抜けず、必死だった。そのことに徐々に疲れていき、自信の消失と先行きが見えない不安に押しつぶされ、この言葉を見ても私は、本当にそうなのか、そう思えば苦勞はしないのに、というようなネガティブな考えしかできなかった。実際に不可能を可能にすることは難しく、努力次第で可能にすることはできないというような話はよく聞くが、努力しても報われないことが多い人生を送ってきた私には、この言葉を心に浸透させることができなかったが、それが変化したのは、この言葉と同ページで紹介されている、エイミー・マリズ氏の生い立ちを見たことがきっかけだった。彼女は生まれつきの足の状態により、手術で膝から下を切断し、義足となったが、彼女は普通の人にとっての逆境を特性、強みとして捉え、陸上選手、モデル、女優など幅広い分野で活躍していることを知り、不利だと思えるようなことを逆手に取り、多くの経験を積み重ねていける強さに感動した。人間には必ず不可能なことは存在し、それが何かは人によって違うが、それをそのまま諦めてしまうから不可能を不可能のまま、当たり前として脳内に刷り込むようになってしまうのだと考える。しかし、マリズ氏は完全に諦めることをせず、そのような状態だからこそできる他のことに挑戦し続けている。これを知ったうえで「不可能」の言葉を見ると、最初に見た時と印象が大きく変わった。本当にできないことはできないままでいい。ならば、代わりに自分から率先してできることを探してみよう。マリズ氏とともに、「不可能」はこのことを読者に伝えているのだと私は考える。そして、この考えは私に自信を与えて、実際に行動を移すに到った。元来、人と話すことが苦手な私は、基礎ゼミナールの授業で研究の発表資料作成の準備の際に話し合いの輪に参加できず、不可能というほどのものではないのに、できなかったことを後悔した。ならば、その分自分に何ができるかを考え、次の授業までに必要になりそうな情報を集め、資料作成を進めることにした。その甲斐もあって、次の授業ではその資料を基に、滞ることなく、円滑に発表の準備をすることができた。私の成したことはきっと誰にも気づかれはしなかったが、それでも目標を決め、行動できたことへの達成感は清々しく、このような些細なことでもやってよかったと思えた。

この言葉から学べたことは多く、他の言葉からも色々なことを考えさせられたが、この本を読んだことで踏み出せる1cmが確かに存在することを知った。大学生活もまだこれからなので、多くの1cmを縮めて、もっと広い世界を自分の目で見てみようと思う。

審査委員講評 南谷 直利 (経済経営学部教授)

北陸大学読書感想文(第20回)・書評(第2回)コンクールに全学より240編の投稿があった。最終審査(49編から選考)では本学の審査委員によって投稿者名、その所属や学年を伏せた条件下で作品が評価された。私も審査員の一人として参加した。最高得点を獲得した作品は、溝尻胡桃さん(医療保健学部1年次生)の「一步を踏み出す勇気の大きさ」(『+1cmたった1cmの差があなたの世界をがらりと変える』Kim Eun Ju著、Yang Hyun Jungイラスト、築田順子訳、文響社、2016年)であった。

溝尻さんは特にこの書籍の中の「不可能にちがいない」、「絶対にムリ」そう言われている世の中の大半のことはただの刷りこみにすぎない、という文章(本書、pp.106-107)を取り上げて、エイミー・マリズ女史に感銘を受けている(エイミー・マリズ、1976年、アメリカペンシルベニア州生まれ。生まれつき足のくるぶしから下の骨が無く、その後手術で膝から下を切断した。しかし、普通の人にとっての逆境を「特性」あるいは「強み」として捉えた彼女は、1996年にアトランタパラリンピックの陸上アメリカ代表となった。その後はアレキサンダー・マックイーンファッションショーモデルとして活躍し、ピープル誌の「世界で最も美しい50人」にも選出された。美しい義足をファッションにするなど彼女にしかない個性で見る者を魅了し、現在モデル、女優、作家、講演者として活躍中である。本書、p.107)。

このように本作品(感想文)は障がい者、健常者、米国人、韓国人、日本人、大学生などからの視点やコメントが分かり易く、私は久々にIntegrityを(真摯、誠実、高潔)感じた。一方で本書(原作本)は定価が一冊1,573円(税込)なので、良いお値段(高め)である。

最後に本書の1つの文章を引用したい。そして皆さんがそれぞれに感じて学んだIntegrityが、学生生活の+1cmに役立つこと(実行)を期待したい。「きみはペット」。愛されるペットと手ひどく扱われるペットの違いは確実にある。それは可愛い、可愛くない、人なつっこい、人ぎらい、珍しい種、ありふれた種、血統書付き、雑種、聞き分けが良い、少しのろま、・・・という違いではない。違いはただひとつ、どんな人が飼い主かということ(本書、pp.210-211)である。

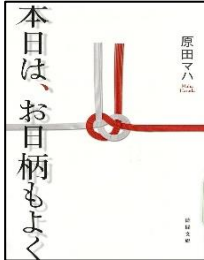


優秀賞（読書感想文の部）

言葉で世界は変わる

薬学部 2年次生

宮崎 琴音さん



書名 本日はお日柄もよく
著者 原田 マハ
出版社 徳間書店

一生のうちで忘れられないような言葉に出会ったことはあるだろうか。部活動の人間関係がこじれた時。受験で自分の力不足を思い知らされて泣きながら職員室を訪れた時。将来の夢を友と語り合った時。気が付けば私のまわりには様々な言葉で溢れていた。心無い言葉で傷つけられることもあれば、たった一つの言葉が前向きな気持ちを与え、自分の世界を色づけてくれることもある。そんな「言葉」が持つ力を、熱く眩しいという言葉がぴったりはまるようなストーリーで、心に訴えかけてきたのがこの本だった。

この物語の始まりは衝撃的だ。片思いしていた幼馴染の結婚式に招待された主人公の「こと葉」は来賓のあまりにも退屈なスピーチに眠気を誘われ、ガシャン！とスープの皿に顔を突っ込んでしまう。そして、その式場で先ほどとは打って変わって涙があふれるほどのスピーチと出会う。それが後のこと葉の言葉の師匠となる伝説のスピーチライター久遠久美の祝辞だった。親友の結婚式のスピーチのため久美の教えを受けたこと葉は空気を一変させる力を持つ言葉に魅了され、働いていた会社を辞めてスピーチライターになる。ついには政権交代を訴える野党のスピーチライターに抜擢され、白熱する選挙戦へと参入する。敏腕美人スピーチライターの久遠久美、俳人でさばさばした性格をしたこと葉の祖母の二宮キク、仕事上のライバルで人を引き付けるキャッチコピーを生み出す和田日間足（わだかまたり）など個性的な登場人物たちも本書の魅力の一つだ。師匠やライバルの存在と家族の支えによって成長していくこと葉の姿や次々と展開される物語のハラハラドキドキ感で、ページをめくる手が止まらなかった。シリアスな選挙戦の中にも笑いあり恋愛あり感動ありの一冊である。

しかしながら、この本の最大の魅力を放つ主人公は、物語の合間に現れては、心を揺さぶる「言葉」たちだと思う。「困難に向かい合った時、もうだめだと思った時、想像してみるといい。3時間後の君、涙が止まっている。24時間後の君、涙は乾いている。2日後の君、顔を上げている。3日後の君、歩き出している。」これは久美が両親を失った時に、父親同然にかわいがってくれていた伯父さんから貰った言葉だ。私はこの言葉で涙が止まらなくなった。これだけではない。本書には友人の結婚式、街頭演説、企業の記念式典と様々なシーンでスピーチが登場する。この言葉に詰まった熱くまっすぐな思いは心を打ち、記憶に深く刻まれた。

インターネットが普及し、SNSが発展した現代社会では言葉はよりダイレクトに、圧倒的な速さで届くようになった。それは人を勇気づけるときもあれば誹謗中傷によって相手の心をひどく傷つけ、死につながることもある。コロナ渦によって混乱し、人々の心に余裕がなくなった社会でそれが顕著に見られたと私は感じた。田舎で初の感染者となった人に対して、ネットニュースのコメント欄やTwitterでは彼らに対して酷く冷たい言葉が投げかけられていた。私はそれが目に入っては胸が痛む思いをした。私は言葉とは生き物のようだと思った。扱うことは難しく、自分の意図しない意味を持って自分の口から飛び出してしまうこともある。しかしながら、生きているからこそ時に人の心に強く響くのだ。人に届かせる言葉とは人と人のコミュニケーションや経験の上で成り立ち、コンピューターが計算で打ち出した言葉とは違う。今を生きる私たちにはこの毒にも薬にもなる「言葉」とどう向き合い、どう操るのが求められていると思う。

本書ではキング牧師やオバマ大統領のスピーチにも触れられている。彼らの言葉は人々の心をつかみ、まさしく世界を変えた。主人公のこと葉たちもまっすぐ熱い言葉で世の中を変えていった。では、この田舎に住む平凡な大学生の私の言葉はどうだろうか。「言葉はメッセージカードのようなもの」これはこと葉の祖母の言葉である。優しい言葉は、ふとした時に自分を励ますかもしれない。誰かの目に、耳にとまれば思いを共有できるかもしれない。心と心を響き合わせることができるともかもしれない。それは人に元気や安らぎを与えて幸せを運ぶかもしれない。私のまわりの世界を変えてくれるかもしれない。言葉はコロナ渦で人々が疲弊した苦しい今こそ輝く力を持っているのではないかと考えた。そんな思いが、私を「言葉の力」を信じたいという気持ちにさせてくれた。

審査委員講評 毎田 千恵子 (薬学部助教)

宮崎さんは、本の中から印象的な言葉を引用しつつ、今までに出会った様々な「言葉」について振り返り、現在の社会における「言葉」との関わりについて考え、これから先に「言葉」が与えてくれる力、希望に思い至っています。

選んだ本の魅力が伝わること、本の世界からさらに広げて物事を見ようとしていること、そして自分の考えがしつかり述べられていることが良かったと思います。また、タイトルの「言葉で世界が変わる」でもわかりますが、本を読んで起こった自分の変化についても書かれています。言葉に対する感性の鋭さが表れている読書感想文だと思いました。

優秀賞 (読書感想文の部)

人のために自分のため

医療保健学部 4年次生

澤野 雛子さん



書名 遠回りがいちばん遠くまで行ける
著者 有川 真由美
出版社 幻冬舎

ついに私はこの大学で4年目を迎え、病院実習、就職活動、卒業研究、国家試験対策で最も多忙な時期になると思っていました。しかし、コロナウイルスによる感染が世界各地に広がり、パンデミックに至りました。その影響で4,5月は大学や病院実習に行くこともできず、その期間は遠隔授業でカバーするという事態になりました。就職活動も思うように動けず、一体どうなってしまふのだろうと毎日考えていました。このような状況下でも何かできることをやらなくてはと思い、自己アピール文を考えたり、病院で働いている方々にネット上でお話を伺ったりなどしていました。ところが、私にとって何が正しくて、何を選ぶのが適しているのか分からなくなり、ぽっかりと心に穴があいたかのように感じました。私は来年医療従事者として本当に人のために働けるのか、患者さんや病院側に迷惑かけるだけではないのかなど不安ばかりが募り、立ち止まってしまいました。そんな時、ある一冊の本の存在を思い出しました。それは私が高校生の時にある問題に直面し、どうしようもなく途方にくれていたときに出会った本です。今の私にもヒントになることがあるのではと思い、読み返して読書感想文として綴ってみようと思います。

まず就職活動に関して、私はどこの病院なら可能性があるだろうか、私を雇ってくれるところはあるのか、など悩んでいましたが、それは自分の能力が信じられず、大学や病院にも迷惑かけないようにしなければと思っていました。冷静に考えるとそんなことは誰にも分かることではないし、やってみなければ解決できないものです。「自分をどう扱ってきたか」が、自分の姿になり、未来をつくっていきます。」という文が第一章で記されていますが、私は根拠がなくても自分を信じて、やりたいことに取り組んで前に進まなくてはいけないと感じました。言霊という言葉が存在しますが、私自身の経験を思い返してみると、ポジティブなことを口に出す方が、物事がうまく進むように感じました。言葉ひとつで行動力や物の見方は変わらと思うので、積極的に前向きな言葉を発するようにならなと思いました。

また、文中に「人のためにやれることがあるとき、私たちは、とても元気になれるのです。」(pp.62-64の要約)の紹介があり、ふと私が医療職を目指すきっかけを思い出しました。北陸大学に入学する前は様々な困難にぶつかり、多くの人に迷惑をかけてきました。そこで、自分の存在価値を見出すため、他人に役に立つためにもこの道を選びました。在学中に、なぜこんなことをしなければならぬのだろうと疑問に思うような作業や活動がありましたが、それが誰かの助けになり、感謝されることになると私はその時までの苦労なんか忘れて、喜ぶことができました。将来、北陸大学を卒業して就職した際にもきっと今まで以上に苦労することが沢山あるでしょうが、初心に戻り、人のために思って頑張る歩み続ける人生を送りたいと思いました。

この本には他にも、どうやって立ち直って前に進むことができるのか、自分を見つめ直すためのアドバイスが記されています。自分に自信がもてない、悲観的なことばかり考えてしまうと人々に読んでほしい本です。この本を読むことで、それぞれの悩みが解決できるかどうかは定かではありませんが、気持ちを切り替えた

り、立ち止まるのではなく行動に移そうという気持ちをもつことはできると思います。自分の思い込みの中で苦しんでいてはもったいないので、この本をきっかけに少しでも自分を変えてほしいなと思います。私自身、この本を読み返してから、面接や自己アピール用に考えていた文をもう一度書き直しましたが、より前向きに将来を見つめることができる文を書くことができました。周りの人たちを巻き込むくらいにポジティブな人になれるよう、毎日一歩ずつ前に歩いていきたいです。

審査委員講評 鍛治 聡 (図書館長・薬学部教授)

著者の期待を大きく超えて

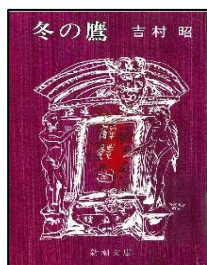
優秀賞の「人のためが自分のため」と題がつけられた澤野さんの感想文を読ませていただきました。『遠回りがいちばん遠くまで行ける』(有川真由美著)の読書感想文です。作者の意図というか、読者に期待していたのだろうと思われる考え方・感じ取り方を超えた大きなものを得たことが綴られている作品でした。良い作品、特に自分に欠けていたものがピタッと当てはまった作品というのは、何度読み直しても新しい感動と力を沸き起こさせてくれるという経験がありますが、澤野さんにとってはまさしくそのような作品であったとの思いを感じさせてくれる感想文でした。同時に、多くの“試験”とは限りませんが、いろいろと鬱屈したものを感じている人たちに是非読んで欲しい本を推薦してくれる作品でした。

優秀賞 (読書感想文の部)

どのような人生を歩むのか

医療保健学部 1年次生

青葉 菜摘さん



書名 冬の鷹
著者 吉村 昭
出版社 新潮社

高校時代の問題に取り上げられていた文章の一部を目にしたのが、この作品との出会いである。ほんの一部の文章だったが、私は作品の世界観に引き込まれた。大学生になった今、学びを深めたいと思っている医療に関係している内容という事もあり、この機会に読んでみようと思った。この作品は、解体新書の成立の過程を著すとともに、訳出に尽力した前野良沢、杉田玄白らの人生を描いた歴史長編である。解体新書というと、杉田玄白を著者として教科書に載っている記憶があった。しかし、この作品では広く名が知れ渡っている杉田玄白ではなく、訳者の一人である前野良沢を主人公としている。

この作品を読んで特に心を動かされたのは、解体新書にかかる良沢らの熱い思いである。解体新書の刊行はオランダ語の解剖書ターヘル・アナトミアを訳出することから始まるが、情報を得る手段がほとんど無い中での翻訳は、不可能に近いとされていた。そのような状況下で、わずかなオランダ語の知識と試行錯誤により、良沢らは訳出を成し遂げた。それを可能にしたのは、初めて腑分けを見た時の感動と、それによって引き起こされた並々な探求心と熱意があったからである。一生をかけてもやり抜くという良沢らの姿に、深い感銘を受けた。私をさらに作品の世界へ引き込んだのは、時系列とともに著された日本の歴史である。政治や天災などの時代背景が所々に描かれており、当時の日本の状況がいろいろと感じられた。

この作品の一番の注目点は良沢と玄白の対比である。解体新書の出版から年月を経るにしたがって良沢と玄白の生き方や境遇が大きく異なっており、文章中にもその違いを強調するような表現が次第に多く見られようになる。良沢にとっての解体新書は蘭学研究の第一歩であった。売名のために学問をするのではないという見解を持ち、医家でありながら解体新書の訳出を通じて蘭学の追究に励んだ。解体新書が日本の医療に計り知れない益をもたらすであろうという認識は、良沢も玄白も共通であった。しかし、玄白にとって翻訳は新しい医学知識を得るための方便に過ぎず、一刻も早く解体新書を出版することが第一であった。そうは言っても、実際の翻訳は良沢のわずかなオランダ語の知識を頼みの綱としていたため、人付き合いの苦手な良沢にとっては一人で黙々と翻訳を進めていく方が良かったのではないかという印象を受ける。だがここで、玄白の持つ能力が発揮される。彼は社会的な性格で

あり、人を観察し分析することに秀でていた。周りを窺って同志の協調を保とうと働きかけたことが、翻訳を進展させる原動力となっていた。また、玄白の的確な意見や提案によって翻訳に大きな進歩がみられることもあり、ターヘル・アナトミアの翻訳は良沢のみでは成せないことであったのだ。名が喧伝することを望まず、狭い人間関係であったが自身の意思を強く持ち、生涯オランダ語研究に尽くした良沢。名声と富を得、多くの人々と交流し、大蘭方医家として生涯を終えた玄白。互いの人間性や人生は大きく異なるが、私はどちらかという玄白に近い思考をもって生活していた。名誉や他人の目といったことに敏感で、物事に取り組む姿勢が周りから評価されるとやりがいを感じ、それも一つの生きがいとなっていた。気づかないうちに、努力は評価されるべきもの、客観的な目が重視されるもの、という固定概念が自分のなかで生まれていたように思う。世に名を残したいと思うことは人間の承認欲求から考えて当然のことであると思うし、それを一つの到達点として物事に向き合う人も多いと考えられる。しかし、良沢のように名声を求めず、自分の信念を頑なに曲げることなく一つの物事に打ち込む姿勢は、私に衝撃を与えた。世間の目ではなく、探究心と熱意によって動いていた良沢の姿はとても生き生きとしていた。このような良沢の生き方は、自分自身を理解し、自分が望むことを明確にしているからこそできることだと思う。私は今までこれといってひたすら打ち込めるようなことがなく、自分が何をしたいのかわからないままであった。それは、自分と向き合う事よりも客観的な評価を考える事を優先し、その場だけの行動ばかりしていた結果である。人の役に立つ、将来性がある、といったような成果はもちろん重要だ。けれども、損得ではなく、自分のための努力ができることも大切であると良沢の生き方から学んだ。

この作品を読み、自分の生き方を見つめ直すことができた。私は、自分の意思で医療の世界へ足を踏み入れた。それは、将来を模索していた自分にとって大きな選択であった。現在、やるべきことはたくさんあるが、新たな知識を学んでいくことに楽しさと充実感を感じている。困難なことはこれからいくらでもあると思うが、自分がこの世界に魅了された時の気持ちを忘れずに、不屈の精神で自分の進む道を切り開いていきたい。

審査委員講評 關谷 暁子 (医療保健学部准教授)

2人の医家の学術的探究心と尽力に対する青葉さんの感動が、感想文の中で素直に綴られています。また、青葉さんは、社会的かつ合理主義的な玄白と学究肌の良沢が歩んだ対照的な人生に触れ、「人の役に立つ、将来性がある、といったような成果はもちろん重要だ。けれども、損得ではなく、自分のための努力ができることも大切であると良沢の生き方から学んだ」と述べています。そして「困難なことはこれからいくらでもあると思うが、自分がこの世界に魅了された時の気持ちを忘れずに、不屈の精神で自分の進む道を切り開いていきたい」と結んでいます。これらの言葉から、青葉さんが、2人の人生を鏡にして、自分自身の価値観や生き方を省察し、今後への決意を固められたことがうかがえます。タイトルが示す通り、まさに「どのような人生を歩むのか」を考えられたのですね。その点が、この読書感想文の最も素晴らしい点だと思います。

青葉さんの感想文を読んで私も興味を持ち、先日同書を読み終えました。良い本に出合うきっかけを下さり、ありがとうございました。

優秀賞（読書感想文の部）

人間のもつ闇の側面

医療保健学部 1年次生

三歩一 桐子さん



書名 告白
著者 湊かなえ
出版社 双葉社

私は湊かなえ先生のデビュー作である『告白』を読みました。この小説は実写映画にもなっていて有名な小説でしたが、私はまだ読んだことがありませんでした。しかし、以前湊かなえ先生の本が好きな後輩がこの小説を面白いと紹介していたのを思い出し、映画の告知な

どをみているうちにどんな内容なのだろうと興味を持ったので、この本を読んでみることにしました。さて、著者である湊かなえ先生は「イヤミスの女王」と呼ばれています。このイヤミスとは、ミステリー小説の一種であり、読んだ後に嫌な気分になる小説のことを指します。私は湊かなえ先生が「イヤミスの女王」と呼ばれていることを知っていたので、この本はどんな嫌な気分を味わえるのだろうかかと期待しながらこの本のページを捲りました。確かに、読んでいる間は始終嫌な気分でしたが、読み終わった後には嫌な気分以上にさまざまなことを考えさせられました。

この『告白』という小説は、自身の子供を校内で亡くした女性教師の森口が「愛美は事故で死んだのではなく、このクラスの生徒に殺されたからです。」という終業式のホームルームでの告白から物語が進んでいきます。各章では、犯人である2人の生徒や熱血が正義であると思っている先生、過保護な犯人の母親などの登場人物それぞれのズレが心情表現や行動などで表現されており、それが何とも言えない気持ち悪さを醸し出しています。また、この小説の登場人物はだれ一人として事件後救われた描写はなく、幸せとは程遠い凄惨な結末を迎えているため、とても後味の悪いものとなっています。

しかし、その中でも森口の犯人に対するラストの復讐は正直小気味良いと感じてしまいました。犯人の一人であるAは、DVされていたにも関わらずとても頭が良かった実母を世界で唯一尊敬していました。しかし、そのDVが原因で両親が離婚し、実母と会えなくなってしまいます。そして実母が別れ際に言った「修ちゃんに何か起これば、ママは約束を破ってでも駆けつけるからね。」を信じ、実母が自分のことに気が付き、来てくれるように殺人を犯そうとしました。しかし、その計画は失敗に終わった挙句、実母は再婚し妊娠までしていることが発覚し、母親に捨てられたと思ったAは実母への復讐のため学校に爆弾を仕掛けました。けれども学校は爆破されませんでした。これは、森口が爆弾を解除したためです。そして森口は爆弾を解除しただけでなく、Aの実母がいる研究室に爆弾を設置しなおしていたのです。Aは実母以外の人間を見下しながら生きていました。また森口の娘を殺してしまったことに対しても一切の謝罪の感情はありませんでした。だから、Aが唯一紐る対象であった実母をAの手で殺してしまうというラストは正直言って少々気味が良いと感じてしまいました。しかし読んだ後、この小説のなかで森口の夫であった桜宮が最期のときに森口に言った「憎しみを憎しみで返してはいけない」「我が子を殺されても復讐をしてはならない、罪を犯した子供たちは更生することができる」という言葉が思い浮かびました。果たして、森口のやった復讐は彼女自身を本当に救うことができたのでしょうか。また、もし森口がただ爆弾を解除しただけだったら、Aはその後本当に更生することができるのでしょうか。

私は心理学で日本の死刑制度について学ぶ機会がありました。現在の日本では死刑制度に賛同している人の方が多数派です。しかし、世界では死刑制度が無い国が多く、また死刑制度を倫理的観点から廃止した国もあります。私は、死刑制度とこの小説のラストは似ていると思います。死刑制度も加害者への一種の復讐であると考えます。また、もし死刑制度をなくしたとしても、本当に加害者が反省し更生できるのかは分かりません。私はこの小説が現代の日本で施行されている死刑制度に対し、間接的に疑念を投げかけているように感じました。

この『告白』を読んでみて犯人の2人の持っていた思春期特有の感情には共感できるところもあり、それがフィクションでありながら不思議と現実感を生んでいて興味深く感じました。ただ嫌な気分になるだけでなく、現代の死刑制度について考えさせられたり、自分の都合の良い解釈しかしない人間の持つ闇の側面についても考えさせられたりしました。ここで考えさせられることは簡単に結論がでるようなものではないと思います。同時に向き合っていかなければいけない問題でもあると思います。私はせめて自身が持つ闇について受け入れ、物事に対し自身の都合の悪いことに目をそらさず、向き合っていこうと思いました。

審査委員講評 大東 万里絵 (国際コミュニケーション学部講師)

湊かなえの大人気ベストセラーである『告白』は、思わず背筋が凍りつくようなミステリー小説ですが、鋭い観点と豊かな感性があふれた素晴らしい感想文だと思います。教師であると同時に一人の親である主人公の、憎しみを憎しみで返してはいけないという理性と、どうしても許せない気持ちの葛藤が見事に描写された作品です。三歩一さんがおっしゃるように後味は決して良くない作品ですが、「人間のもつ闇の側面」についていろいろ考えさせられる奥深い作品です。

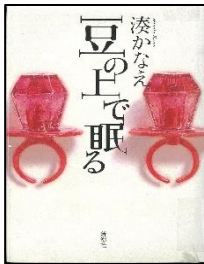


優秀賞（書評の部）

驚きの連続、姉妹ミステリー

医療保健学部 1年次生

森田 なつみさん



書名 豆の上で眠る
著者 湊 かなえ
出版社 新潮社

大学二年生の夏休み、実家に帰省し母のお見舞いに向かうため実家近くの駅で病院行きのバスを待っていた結衣子。そこで、友達と一緒にいる姉の万佑子を見つける。万佑子を見つけたときに違和感を抱いた結衣子は急いで姉を追いかけたが貧血で倒れ、駅の救護室に運ばれた。結衣子は、姉が失踪した事件のことを思い出す。姉は何かを隠している。小学生から大学生になった今まで、ずっと抱いていた違和感。お姉ちゃん、あなたは本物なの？

この小説の著者は代表作『告白』で週刊文春ミステリー第1位、このミステリーがすごい！で第4位になった湊かなえである。読んだ後に嫌な気分になるミステリー「イヤミス」の優れた書き手であり、刊行作が次々とドラマ化・映画化されており、注目を集めている。

私自身、湊かなえの本をよく読んでおり今回も読み手を驚かせる描写がいくつもあり、そして読んだあとの気分はあまりよくない作品であったため流石優れたイヤミスの書き手だと感じた。

主人公の幼い頃に起きた事件からずっとある姉への違和感、そして真相へたどり着いていくのだが、この真相を知ったときに嫌な気持ちになるのが湊かなえの作品である。兄弟のいる人間にとって考えさせられる所があり、自分の兄弟もずっと一緒にいるから気づいていないだけで本物ではない可能性があるのだと思った。兄弟に対して今まで感じなかった違和感があるような気さえしてくる。

そして、この作品の最後に問われている「本物とは何か？」これについて誰もが最も考えることになるだろう。本当に自分が信じているものが正しいのか、自分が本物であると信じているものが本当に本物であると言い切れるのか、と考えるがその答えは見つからない。ただ、人は無意識に自分がそうであってほしいと思うものをそうでなかったとしてもそうあるものとして信じ込んでいるのかも知れないと私は思った。

自分の兄弟や家族、そして本物とは、と深く考えてしまう場面があると思うが、そういうことを一切考えず最初は湊かなえの世界を楽しむ気持ちで読んでもらいたいと思う。そして、楽しんで読んだ後に余裕があったら“本物”とは何かを考えてみてほしい。

審査委員講評 田邊 良和 (図書館事務課長)

書評の部からただ一人、優秀賞に選ばれたことは大変素晴らしいことだと思います。書評は読書感想文に比べ少ない文字数で書くため難しかったと思いますが、よくまとめられていたと思います。また、湊かなえさんの作品の良さも伝わってきました。

私自身も読んでいるうちに森田さん同様に姉妹や家族に対する「本物とは何か？」についていろいろ考えさせられました。その中で森田さんは、「本物であってほしい」という気持ちについて深く考え、それを素直に表現されていたと思います。

これからも森田さんには、家族のことのみでなく医療についてなど、さまざまな面で「本物とは何か？」について考えていってほしいと思います。



第20回読書感想文、第2回書評コンクール受賞者コメント

第20回読書感想文、第2回書評コンクールで、最優秀賞、優秀賞を受賞した6名から次のとおり受賞のコメントをいただきました。



最優秀賞（読書感想文の部）

医療保健学部1年次生 溝尻 胡桃さん

この度は最優秀賞に選んでいただき、ありがとうございます。今年は慣れないことの連続で、そのような中で『+1cm たった1cmの差があなたの世界をがらりと変える』という本に出会えたことは、奇跡だったと感じています。読者を励ます文章の中に込められたメッセージの読み取りでは、新たな発見をすることができるだけでなく、今までの自分を振り返ることができることにも気づき、ここから今後の歩みのヒントを多く得ました。本を通じて抱いた想いを文章に表せる読書感想文は、より自身を高め、更に本に触れたいと思うきっかけになりました。



優秀賞（読書感想文の部）

薬学部2年次生 宮崎 琴音さん

優秀賞をいただき、嬉しく思います。私の読んだ本はスピーチライターという職業を通じた言葉に纏わる物語ですが、昨今のコロナ禍を踏まえ、言葉が持つ力を考える良い機会となりました。言葉とは諸刃の剣で、使い方を誤れば人を傷つけ、正しく使えば人の心の支えになるのだなと感じました。これからも様々な文章や表現、考え方に触れて物事の核を捉えられる力を身につけたいと思います。ありがとうございました。



優秀賞（読書感想文の部）

医療保健学部4年次生 澤野 雛子さん

4年間読書感想文を書いてきましたが、優秀賞を頂けたのは初めてですので、非常に光栄に思います。

私は元々読書に苦手意識を持っていましたが、大学入学を機に、読書を習慣付けるために毎年読書感想文に取り組んできました。様々な本に触れることでモノの見方や考え方、受け止め方などが変わり、早くから読書に興味を持ちたかったなあと感じています。

読書がきっかけで自分自身に何かしら影響があるのはもちろんですが、他者との話題作りにもなりますし、本は素敵なツールであると思います。社会人になっても読書は続けたいです。

今回は本当にありがとうございました。



優秀賞（読書感想文の部）

医療保健学部1年次生 青葉 菜摘さん

今回、優秀賞に選んでいただきありがとうございます。受賞できたこと大変うれしく思います。登場人物の偉業や価値観、生き方には心を揺さぶられ、ページをめくる手を止めて考え込む場面が何度もありました。今まで自分のなかにあった考えと新たに生まれた思いを感想文として言葉にすることで自分自身の考えを改める機会となり、将来を見つめなおすことができたかなと思います。これからも日常に読書を取り入れ、素敵な作品との出会いを楽しんでいきたいです。



優秀賞（読書感想文の部）

医療保健学部1年次生 三歩一 桐子さん

今回、優秀賞に選んでいただき本当にありがとうございました。今までの読書感想文は指定された本を読んで書いていましたが、今回自分の興味があった本を選んだためスラスラと楽しく書くことができました。また、何回も読むことで構成や伏線が作り出す面白さをより味わうことができ、本を読み直してみることの大切さも学ぶことができました。これからも多くの本を読み、その作品が持つさまざまな面白さを知っていきたいと思います。ありがとうございました。



優秀賞（書評の部）

医療保健学部1年次生 森田 なつみさん

今回は私の書評を優秀賞に選んでいただきありがとうございました。

読書感想文とはまた違う目線で本を楽しみ、評価できたように思います。初めて書評を書いたため、本文章の書き方はこれでいいのか、評価するという目線で書けているかととても不安になりながら書き上げたのを覚えています。

このコンクールをきっかけに本の楽しみ方が増えて良かったです！

◆◆ 第3回ビブリオトーク開催 ◆◆

令和3年1月13日(水)、第20回読書感想文・第2回書評コンクール表彰式の後、昨年度に引き続き、第3回ビブリオトークを行いました。最優秀賞・優秀賞の学生5名が自分の選んだ本について、その本を読んだきっかけや本の内容などを熱く語りました。

審査委員の先生方は、学生たちが読書を通じて様々なことを学び、成長できたことに感銘を受けたという温かいコメントがありました。コロナ禍・大雪のため初めてのオンライン開催となりましたが、無事に開催することができました。

◆◆ 寄贈図書 ◆◆

本学の教職員から、下記のとおり図書の寄贈がありました。紙面を借りて厚く御礼申し上げます。

書名	寄贈者
『エビデンスに基づく検査診断実践マニュアル』他	計12冊 柴田 宏 (医療保健学部長・教授)
『観光化する社会』他	計3冊 長谷川 孝徳 (国際コミュニケーション学部教授)
『経済論文の技法』他	計6冊 楠山 大暁 (経済経営学部講師)
『戦後日本のマクロ経済分析』他	計25冊 宇都 伸之 (経済経営学部助教)
『ライオンのおやつ』他	計18冊 西村 香佳里 (薬学総務課職員)

北陸大学図書館報 NO. 50 令和3年3月31日発行

編集・発行：北陸大学図書館 〒920-1180 金沢市太陽が丘1-1 TEL. 076-229-3021 FAX 076-229-4850

Eメール：lib@hokuriku-u.ac.jp 北陸大学図書館ホームページ：<https://www.hokuriku-u.ac.jp/about/campus/library/>